

精神科学における手続きとしての「適用」

—— H.-G. ガダマーの哲学的解釈学における「適用」概念の検討 ——

下 山 千 遥

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿は、H.-G. ガダマーの著『真理と方法』（1960年）およびその周辺著作における「適用 *Anwendung*」概念の理論的位置づけと機能を、精神科学論の文脈から再検討するものである。従来「適用」は、解釈者の現在の状況への意味の具体化とされるにとどまり、その理論的・方法論的意義は十分に論じられてこなかった。これに対し本稿では、まず、自然科学における「手続き」としての「方法」に依拠することで学問の確実性を担保しようとする新カント派およびディルタイの学問観へのガダマーの批判を再構成する。その批判の核心を捉えた上で、本稿では、ガダマーの「適用」概念がそのような確実性中心の学問構造とは異なる精神科学の「手続き」として構想されていることを明らかにする。特に、「問い」の形成および「完全性の先行把握」という理解の構造に注目し、「適用」が学問的正当化の枠組みを生み出すプロセスであることを論証する。これにより、「適用」は単なる実践的操作にとどまらず、ガダマーの解釈学において中心的な理論的・方法論的契機であり、人文学における学問的正当性の根拠を与える枠組みとして再評価されうること示す。

キーワード：ガダマー、解釈学、適用、新カント派、人文科学方法論

1. 序

本稿では、H.-G. ガダマーが主著『真理と方法』（1960, 以下WM）で展開した哲学的解釈学の体系における、特に精神科学 *Geisteswissenschaft*¹⁾の方法論、すなわち「手続き *Verfahren*」について検討を行う。この検討の鍵概念となるのが、「適用 *Anwendung*」である。一般的に、解釈の場、特に精神科学におけるテキスト解釈の場での「適用」とは、テキスト内の何か（単語、一文、段落、テキスト全体など）に、解釈者が解釈した何か（「意味」「意図」「文脈」など）を、「適用」というしかたで考えられる。ここにおいて、解釈における「適用」とは、解釈内容が確定され、（暫定的に）成立した最中に起っている作用・

機能であると言える。

従来の先行研究においては、解釈における先入見の影響や解釈者の有限性、地平拘束性をガダマーが徹底的に指摘した点に、ガダマー解釈学の特異性を見出そうとしている（z. B. Fehér, 2016）。このような特徴づけは、ガダマーにとって解釈が「対話と同様に、問いと答えの弁証法によって閉じられた円環」（WM: 392）、つまり無限に繰り返されるものとみなされている側面に重きを置くこととつながる。

解釈のプロセスが無限に続くことを強調し、解釈の最終的な確定が現実において可能であるかを積極的には言述しない²⁾。このようなガダマーの態度からすれば、解釈の暫定的な確定・成立契機である「適用」は、派生的な概念であり、ガダマー解釈学体系での中心的役割は「言語」「解

釈学的状況」「地平」「地平融合」「作用史 Wirkungsgeschichte」などといった他の概念が担っているように一見思われる³⁾。

他方で、「適用」概念を、ガダマー解釈学を特徴づける概念として重要視している既存の研究も多く存在する。Lawn と Keane が編んだ『ガダマー事典』では、ハイデガーが解釈学的なものとして示すものと地続きに、ガダマーが自身の解釈学体系に組み込んだ第三の契機として「適用」を挙げる。「知識と洞察の追求は決して中立または公平なものではなく、特定の個々人の追求における関心へと常に関連づけられる。したがって、人は常に自己自身へと理解を適用しており、このため全ての理解は究極的には自己理解である。」とまとめられ、「適用」はガダマー解釈学を特徴づける独自点として評価される (Lawn/Keane, 2011: 11.)。Davey (2022) も、ハイデガーが解釈学として概念化したものに連続させて、ガダマーの解釈学の体系に統合されたモーメントとして「適用」を捉える。「言葉によって創造された」世界は、そのような可能性の宝庫である。しかし、思考が向かうのは、論理的に可能なあらゆる他の意味だけではない。解釈学的な志向を持つ考察の課題は、経験に対する概念の新たな具体的な適用を約束する抽象的な可能性を識別することである。解釈学的反省は、純粋理性の行使ではない。解釈学的思考がどれほど抽象的であろうとも、解釈学的反省は常にすでに解釈学的感受性によって準備されている」(Davey, 2022: 71f. 強調は引用者による)。また、Weinsheimer (1985) や Lessing (2024) は、ガダマー解釈学における知 Wissen (knowledge) が個別具体的状況に「適用」される知、すなわち道徳的知識と同様の構造を持っていること、それが WM 内での「適用」概念の説明からも読み取れることを強調する。解釈を行ういかなる人間も、その人間が被投された状況、すなわち解釈学的状況に拘束されている。この状況ではわれわれは理解に先立って、常に先入見を抱いている。こうした状況でのみわれわれは解釈を開始することが可能であるという、理解の基点としての先入見の徹底を行なった上で、精神科学における知が個別具体的状況へと適用される知であることを指

摘したことが、ガダマー解釈学の決定的な点なのである (Weinsheimer, 1985: 188ff./Lessing, 2024: 169ff.)。

しかし既存の研究では〈ガダマーの解釈学的思考は適用によって規定される〉ことまでは明示的に述べられていても、その規定の内実をめぐっては、WM におけるガダマーの記述の再構成を超える解釈を未だ提示できずにいる。すなわち、〈なぜ他の適用のしかたでなく、その適用が選ばれたのか〉、〈様々な解釈可能である、または解釈される内容が判然としていないなかで、ある一つの「適用」が起こり、解釈が成立する時、その適用と、他の適用される可能性があったものとを区別するものはなにか〉を、ガダマー解釈学の中でどれだけ問うことができるのかについて、考察がなされていないのである。

上記のように定式化した課題は、精神科学の方法論としてガダマー解釈学体系を解釈しようとした際に、特に浮き彫りになる。というのも、精神科学の営みにおける解釈の確定は、この「適用」がどのようになされたかによって規定されるためである。

精神科学という学問の中では、よりよい解釈を提示することが目的として据えられる。ここでの「よい」解釈のあり方にも様々なものを考えることができるが、「よい」の内容がいずれのようのものであったとしても、解釈者自身が解釈を提示する際には、その解釈が他の解釈よりも「よい」と (少なくともその解釈者が) 考えているはずである。そのためこの「よさ」は、解釈者がテキストに対してどのように解釈を遂行し、「適用」を経たかによって定められるということになる。

本稿では、ガダマーの解釈学の体系において、特に精神科学のテキスト読解という位相で展開される議論において、「適用」が中心的な役割を果たしているという立場を取る。

本稿では「適用」概念を二つの段階を経て検討する。

まず、ガダマーが既存の精神科学論の問題をどのように認識していたのか、特に精神科学と自然科学との関係についての議論において明らかにする。精神科学論の文脈では、WM の時点ではディ

ルタイが彼の主な論敵と設定されているが、ディルタイ解釈学が構想した精神科学の構造のどのような点を問題として捉えていたのか、WM の記述では十分に示されていない。そのため本稿では、ガダマーがより直接的に上記の懸念を表明している WM 公刊以前のヴァージョン “*Wahrheit und Methode. Der Anfang der Urfassung* (ca. 1956)” (以下、*Urfassung*)⁴⁾ のうち、既存の精神科学像の問題点を具体的に扱っている箇所を参照する。ここでは、自然科学的「方法 *Methode*」に則するようにその構造自体を整えることによって、精神科学においても「確実性 *Gewißheitsgrad*」を獲得しようという哲学分野での試みをガダマーが問題視していることが明らかとなる。自然科学的「方法」がもたらす「確実性」は、精神科学における真理へと接近する「手続き」として不適切である。先んじて述べれば、これがガダマーの批判の核心である。ディルタイでなく、新カント派に対するガダマーの批判を WM でない別の論考から参照することは、この問題点をより克明に映し出すのに寄与する。というのもガダマーの見解に則するならば、「方法」による「確実性」の獲得という精神科学像の構想は新カント派で確立されたが、これを一部のみ乗り越えたままに終わってしまったのが、ディルタイ解釈学であるためである⁵⁾。

次に本稿では、「適用」は、「方法」への依拠によって得られる「確実性」に頼らずに、学問としての正当性を保つ精神科学のヴィジョンを提示するうえで重要な役割を果たしていることを論証する。つまり、「適用」とは、「方法」に取って代わる精神科学の「手続き」であることをわれわれは主張する。

先行研究では、精神科学の学問的自立性、つまり自然科学への非依存性をガダマーが提示する際の核たる要素を、他のさまざまな概念に見出してきた。例えば「先入見」や「作用史的意識 *Wirkungsgeschichte Bewußtsein*」(Grondin, 2001: 157ff.)、「歴史」や「人文主義的伝統」(Weinsheimer, 1985: 2ff.)、もしくは「言語」における意味の文脈依存的な「出来事性」(Da Via/Lynch, 2024; 220) などである。

これらに対してわれわれの主張をよりよく示す

ために、WM で十分には説明されなかった、「適用」概念の要素を取り上げる。そのため本稿では、WM の出版直前のガダマーの著作における議論を検証し、この要素についての議論がより明確に展開されている箇所を検討する。これらを参照することで、ある「適用」の正当性を測る「尺度」として、「確実性」への接近ではなく、解釈の都度規定し直される「完全性の先行把握 *der Vorgriff der Vollkommenheit*」がガダマーによって採用されていることが明らかとなる。

2. 自然科学的「方法」概念の精神科学への侵襲：背景に潜む新カント派的学問論

本節では、*Urfassung* および WM 以外でのガダマーによる新カント派への言及を分析し、論敵とされる哲学者らによる精神科学像に対する彼の批判の焦点を明確化する。これによって、「方法」に基づく精神科学像が、精神科学の学問的自立性を確立するための誤ったアプローチとして退けられることを確認する。WM では、精神科学の基礎づけという文脈において、もっぱらディルタイがその論敵に据えられている (WM: 222ff.)⁶⁾。その批判の主眼は、ディルタイが構想した精神科学像がヘーゲルの客観的精神の概念を、本人の意識とは裏腹に、継承しているという点に置かれる。[[直前のディルタイからの引用を受けて] これは間違いなく、ヘーゲルの概念の再編成である。[…] 最も重要な側面は、明らかに、[ヘーゲルの] 客観的精神の概念が、芸術、宗教、哲学へと拡張されていることであると思われる。というのも、ディルタイはこれらにも、直接的な真理ではなく、生 *Leben* の表現形態を見ていることを意味するからである。[…] それゆえ、ディルタイ[の解釈学] にも、真に《絶対精神》、すなわち、完全な自己透明性、あらゆる他者性や異質性の完全な排除という形の精神があるのではないかとわれわれは自問せざるを得ない」(WM: 233) とあるように、この点が WM での「歴史意識」への批判となる。ガダマーがいうここでの歴史意識とはすなわち、歴史資料を解釈し、歴史を記述する場面においては、解釈を行う人間精神の歴史的背景

を透明化できることを前提した態度を指す。ガダマーからみれば、こうした前提抜きには「方法」に則する精神科学は構想できないのである。このような「歴史意識」は、解釈者もまた歴史的に拘束されているという、ディルタイがヘーゲルを批判する際の前提との間に矛盾が生じる。しかしWMでのディルタイ批判は、さらにさまざまな要素が取り入れられる。「体験 Erleben」を自然科学の対象と異なる仕方で捉えていることを評価するという肯定的な評価と、「方法」概念への接近の誘惑に勝てなかった、といった否定的な評価を何度も行き来するため、全体としてガダマーがどのような精神科学像を批判したいのかを詳細に掴むことは容易ではない。

このような状況の打開策として、われわれはUrfassungを参照する。Urfassung冒頭での記述は、既存の精神科学像に対する批判点をWMよりも直接的に指摘している。ここから、ガダマーの“大きな”論敵としての「方法」依存の精神科学像は、それを徹底したものとして、ディルタイ解釈学よりもむしろナトルプなどに代表されるような、新カント派⁷⁾的学問論からその詳細な像を得られることがわかる。

〔…〕〔精神科学によって打ち立てられる〕こうした〔哲学の論理的・認識論的な基礎づけについて、また自然科学に対しての哲学の学問的自立性についての〕問題は無でありうる——もしくはすべてでありうる。〔…〕しかし精神諸科学の理念が、それを自然科学的認識の理想に還元することが不可能であるところでの自立的な仕方をした学問として承認されるどころでは、いやそれどころか、自然科学の方法と確実性の度合い Gewiheitsgrad を最大限接近させるという理念がそもそも不合理なものとしてさえ認識されているところでは、哲学それ自体が、哲学がもつ全関心事とともに担ぎ出されている。それゆえ、精神諸科学の方法的特性を方法的なものに制限してしまうような議論は無益である。つまり、別の特性づけられた方法が問題となるのではなく、認識や真理についてのまったく異なる理

念が問題となる〔…〕。(Gadamer, 1992: 131)

ガダマーの主張を整理し直すと、以下のようになる。①哲学の学問的自立性は精神科学の自立性の希求から要請される、②哲学および精神科学に問われている学問性を、自然科学を基として、「自然科学の方法と確実性の度合い Gewiheitsgrad を最大限接近させるという理念」から考えるならば、精神科学は不完全な学問にしかかなりえない、③それゆえ、方法的特性の付与ではない仕方で、哲学および精神科学の学問性を考えなくてはならない。

またこの直後にディルタイの名も登場するが、精神科学の基礎づけについて「自然と歴史の根底と、双方に可能的な真理の根底を考察する」(Gadamer, 1992: 132) ことを志向した人物として紹介される。ここでのディルタイは自然科学に接近させるのではない精神科学の基礎づけを実践しようとする組んだ実践者とされており、やや肯定的に評価されている。

ここで、哲学の徹底した「方法」化を推し進めようとした人物として、マールブルク大学時代のガダマーの師であるナトルプが挙げられる。

ナトルプの生誕100年記念式典にガダマーが登壇した際の講演を論文化した「パウル・ナトルプの哲学的意義」(1955)⁸⁾において、ガダマーはナトルプの思想に対し、次のように批判的な説明を行う。以下に引用する直前でガダマーは、新カント派、特にマールブルク学派に属するコーヘンの学問観が、倫理学や精神科学でもあくまで科学的事実に基礎付けられる、というものであったのに対し、ナトルプがそれを問題視し、〈批判的方法に基づく心理学〉と課題化したことを説明する。ナトルプの思想がディルタイやフッサールのものに徐々に接近しつつあったと指摘した直後で、ガダマーはナトルプの思想の性格を描出する。

しかし、この心理学についての問いは、精神諸科学を新たに基礎づけするという課題にも、哲学的な探究の方法的な新しい方位 methodischen Neuorientierung の決定にも当てはまらず、哲学一般の体系的統一という思想に当て

はまる。すなわち、客観化と主観化の相関において表される、言い換えれば、方法、プロセス、生成 *fieri* の思想の完全な支配においてなお科学における事実について表される統一である。したがって、ナトルプはマールブルク学派の最も厳密な、方法の狂信者 *Methodenfanatiker* かつ論理主義者に当てはまる。(GW10: 376)

上記のように、*Urfassung* 執筆時 (1956 年頃) に近い年代で発表された文書においても、ガダマーは「方法」による哲学の学問的構造の基礎づけという看板を、新カント派に対して付している。ガダマーの批判対象、またそれが目指す精神科学像を、新カント派的学問論になぞらえて解釈することで、ディルタイへの批判もよりその内実が明らかになる。

既に確認したが、精神科学の「方法」による基礎づけという考え方を批判する文脈では、その標的はディルタイが中心であった。一方で、「体験」「経験 *Erfahrung*」⁹⁾ の重視という点で、ディルタイが新カント派に対して優位であったとも評されている。新カント派に欠落していた「経験」を掬い取っていた、つまり自然を認識するという自然科学の領域での経験と根本的に異なるものとして「経験」を捉えていたために、ディルタイは新カント派よりも一歩歩を進めている (WM: 225)。このことから、以下の図式でガダマーの批判を捉え直す。まず、「方法」化によって「確実性」を得ようとする新カント派的学問論は、ガダマーが批判する態度を徹底してしまっている。一方で、新カント派よりも評価されるのがディルタイである。精神科学においてはその対象が「経験」「体験」であること、つまり自然科学の対象とは質が異なるものであることにまで洞察がなされた点で、ディルタイは新カント派よりも議論を成熟させている。しかしディルタイもまた、「自然科学の方法と確実性の度合いを最大限接近させるという理念」に囚われている。「方法」による「確実性」の獲得という学問モデルによってその学問内での言述の正当化を担保できるという発想が、ディルタイ解釈学では、新カント派と同様に根づいたま

まなのである。

この図式的理解は、本稿では以下のように寄与する。WM でのガダマーのディルタイ批判の核心は、認識の「確実性」と「方法」とを精神科学のうちにも構想しようとしたことであった。それは、哲学、ひいては精神科学を、「確実性」を求めて「方法」に則れるよう成型することによって、その学問性を確証しようという立場である。そして「方法」に則れるような成型とは、自然科学における「対象 *Gegenstand*」としての自然に見られるように、主体/客体関係でもってわれわれが認識するものとして、精神科学の対象をも捉えることである¹⁰⁾。

以上の本節での議論によってより詳細に導出された批判に応答するために構築されたのが、ガダマー解釈学の体系である。次節以降で述べるように、その骨子に関わる中核的な概念が、「適用」であるとわれわれは考える。

3. 「適用」概念の位置づけ： WM における議論

前節でのガダマーの批判は、精神科学を不完全な学問とみなすことを意味しない。むしろガダマーは、精神科学の学問的自立性、すなわち学問内部における「解釈」の「正しさ」を、自然科学的な「確実性」に依拠せずにどのように提示し論証するかが、精神科学側の課題として要請されることを示そうとしている。

本節では、この課題を解決する鍵概念としての「適用」を論じる前段階として、まず WM における「適用」概念の位置づけを確認する。「適用」は解釈学的課題の一環であり、ガダマーはこれを「精神科学的解釈学を法解釈学、神学的解釈学の伝統に基づき新たに規定する」(WM: 316、強調はガダマーによる) ものとして位置づける。そして、「解釈学の課題に位置づけられた諸問題のモデル」(WM: 329) として、アリストテレス倫理学の解釈へと議論を接続する。

「適用」は、WM 第二部第二章第二節 a 項「適用という解釈学的問題」において主題的に取り上げられる。ここでガダマーは次のように述べる。

〔解釈学について〕われわれは熟考してきたが、解釈学の問題設定を次のように割り振ってしまうことは阻まれるだろう。つまり、解釈者の主観性と、理解されるべき意味の客観性との二つに、である。(WM: 316)

すなわち、解釈学およびそこから構想される精神科学において、主観性と客観性の二元的な定立を前提とすることは適切ではない。この要請に応えるものとして提示されるのが「適用」の契機である。そして、次のb項「アリストテレスの解釈学的アクチュアリティ」へと議論が展開する。ここでは、アリストテレス倫理学の解釈が解釈学と関連づけられる。ガダマーによれば、両者は次の点で共通する。すなわち、アリストテレス倫理学では、道徳的知を行使し、善をなすことが求められるのに対し、解釈学では、解釈を誤解や恣意的理解ではなく「よき解釈」に向かわせることが求められる。

より詳細に検討すると、ガダマーの見解では、アリストテレス倫理学において、行為者は具体的状況において善の要請を受けるが、この要請はある種の普遍性に基いている。そして、具体的状況の規定は、この要請される普遍性に則してなされる。この相互規定的な構造は、道徳的知の把握を可能にする動的な循環関係を生み出す。ガダマーは、これを解釈学的状況、すなわち精神科学の遂行の場と同構造であると見なす。

この特殊／普遍の関係は、上述で論じた「方法」に基づく精神科学像と対立する。ガダマーにとって、自然科学的「方法」とは、後から辿る「道 $\mu\epsilon\theta\omicron\delta\omicron\varsigma$ 」であり(GW2: 48)、適切な条件が整えば、誰もがその「方法」に則って同じ結論を得ることができる。つまり、認識の「確実性 Gewiheit」を確保するように対象の個別具体性が捨象されていることが、「方法」を用いる要件として働いているのである。しかし、個別具体的な状況において特殊／普遍の循環関係が前提されるならば、確実性を尺度とし、「方法」に則った学問は、精神科学において適切に機能しないことが示唆される。というのも、捨象されるべき特殊と、対象に残されるだろう普遍とがともに静的・固定的でなければ

ば、特殊の捨象による「確実性」の確保は不可能であるためである。

この考察を通じて、「方法」に依拠せずに精神科学の営みを記述するというガダマーの試みにおいて、「適用」概念の重要性が浮かび上がる。しかし、WMでは、解釈者の現在の状況に「適用」されたテキストを実際に「解釈」する場面、すなわち解釈者がテキストに対して「適用」を行う過程については明確に論じられない。議論は「作用史」や「作用史的意識」へと移行してしまう。

4. 講演「真理とは何か」の検討： 要請される「尺度」

これまでの考察により、WMにおける「適用」概念の特徴を確認した。それは、アリストテレス倫理学解釈との関連において構想され、個別具体的状況における特殊と普遍の循環関係を形成する契機として位置づけられる。特に、この関係の中で〈特殊が普遍へと向かう運動〉がどのように生じるのかを明確に論証することが、「方法」に依拠した精神科学像を乗り越えるために求められると考えられる。

先ほど述べたように、解釈学と重ね合わせられるアリストテレス倫理学の構造において、具体的状況において要請される善の実現は、ある種の普遍性に基いてなされる。この構造を解釈という場に移して考えると、以下となる。よい解釈、より適切な解釈、つまり、ある種の「正しい」解釈は、解釈が行われる具体的な状況において求められるが、それがなされる場において、「正しい」解釈がいかなるものであるかを規定するのに、ある種の普遍性が働いている。このように考えると、ここで働くある種の普遍性とはいかなるものであるのか、それがガダマー解釈学においてどのように描出されているのかという新たな課題が発見される。

しかし、これをWMから見出すには、大きな障害があることがただちに浮き彫りとなる。WMでは話題の転換が頻繁に行われ、提示された問題設定が十分に精査される前に議論が進行する傾向がある。そのため、「適用」がなされる場で働く

ある種の普遍性なるものを直接抽出することは困難である。本節では、WM 公刊直前の諸論考を参照しながら、「適用」の立ち位置を再解釈する。具体的には、次節の引用でもわかるように、ガダマーのうちでは自然科学の学問的「手続き」として「方法」が据えられているのに対し、ガダマー自身の解釈学においては、精神科学の実際の遂行過程に関わる学問的「手続き」として「適用」が捉えられていることを、われわれは示す。この操作を経ることで、この普遍性がどのように扱われているのかを論証することが可能となる。

4.1. 近代科学における「方法」と「確実性」

ガダマーにとって、「方法」とは、近代科学が重視する「確実性」の理念を支えるものとして位置づけられる。以下、1955 年の講演「真理とは何か」から、ガダマーの見解を示す。

近代的意味での方法は、種々の諸科学が持ちうる方法のすべてにおいて統一的なものである。〔…〕誰かが通ったように、何度も後から追うことができる、これが方法的であるということであり、科学の手続き *Verfahren* を際立たせる。しかし、ちょうどそれによって、一般に真理要求によって現れうるものの制限が、必然的になされる。検証可能性が——どんな形式であれ——常に真理 *veritas* を形成するとき、それによって認識が測られる尺度 *Maßstab* は、もはや認識の真理 *Wahrheit* ではなく、認識の確実性 *Gewißheit* である。(GW2: 48)

ここでガダマーが指摘するのは、近代以降の自然科学における「方法」が、認識の確実性を担保するものとして機能している点である。近代以降、自然科学の方法論は、研究対象の如何を問わず、それに則することで普遍的な結果が得られる、学問間で統一的な「手続き」と見なされるようになった。ガダマーは、この構造を科学史の観点から捉え、次のような視点を提示する。すなわち、古代ギリシア的な科学観においては、真理と主観的認識の対応関係が重視され、どの程度真理に到達で

きているかを問うことが中心的な問題であった。一方、近代科学では、数学的「確実性」によって現象を記述することが主眼となり、この「確実性」が科学的認識の理想形として受け入れられるようになった。ガダマーは、この転換が、近代科学がもつ「方法」の理念を支えていると考える。

4.2. 精神科学における「方法」とガダマーの批判

この点を踏まえたうえで、ガダマーは、人間の認識の「確実性」に則した「方法」が、自然科学を発展させた要因である一方で、精神科学に適用されるべきかどうかを徹底的に問う。

それにもかかわらず、主観的経験の偶然性を客観的認識によって、すなわち、多義的な象徴系をもつ言語を概念の一義性によって克服することこそ、〔近代の〕学問が要請するものなのである。しかし、次のことが問われる。すなわち、科学〔学問〕そのものの内部に、判断の本質と言表の真理 *Aussagewahrheit* それ自体に存する客体化可能性の限界が存在するのか、という問いである。(GW2: 49)

方法に則しては、すなわち「言表の証明可能性に則しては」(GW2: 50)、「判断の本質と言表の真理 *Aussagewahrheit* それ自体に存する客体化可能性の限界」は測られえない。これが「方法」に即した精神科学像の欠陥の核心だとガダマーは考えていると、われわれは解釈する。つまり、ガダマーは、「方法」に依拠せずに精神科学の営みを記述する試みを提示する。それは、認識の「確実性」による保証ではなく、理解の「尺度」が問われる場面において機能するものである。

4.3. 「問い」と「適用」

「判断の本質と言表の真理」、言い換えれば「真理認識と言表可能性の関係」(ebd.) について、ガダマーは、「方法」に基づく認識の確実性が精神科学に“適用”し得ないことを示す。その上で、精神科学における理解の「尺度」がどのように形成されるかを次のようにガダマーは論じる。

その言表が真であると見なされる際に、その言表が提示する内容に対してのみ把握される言表など存在しない。あらゆる言表は動機づけられている。あらゆる言表は、その言表が言表しない諸前提をもつ。この諸前提をとともに考える者のみが、言表の真理を実際に測ることができる。いまや私が主張するのは、あらゆる言表のそうした動機づけの最終的な論理的形式とは、問いである、ということである。(GW2: 52, 強調は引用者による)

精神科学における理解は、確実性の保証によってではなく、「問い」を通じて展開される。言表の理解は、あらかじめ規定された確実性の基準に基づいてその正誤が測られるものではない。どのような「問い」に応じているかを見極めることによってのみ、その理解はよき理解であるか否かを測られるのである。「いかなる言表も、ある種の問いへの応答をなしている。したがって、いかなる言表の理解も、それが応答している問いの理解からのみ、その唯一の尺度 *Maßstab* を獲得するのである」(ebd.)とガダマーが述べる時に示そうとするのは、まさにこのような場においてはじめて、理解の「尺度」が形成される事態である。「問いの理解」、すなわち理解の過程としてテキストに投げかけられる問いは、「言表の理解」、つまりテキストの言述として解釈(理解)される答えに対して、「尺度」として働く。

言表の理解、つまりある解釈を適用されたもののよさを測る「尺度」を与える、こうした「問い」は、単なる恣意的な動機づけによって得られるものであってはならない。「とりわけ、その問いもまた同様に、私たちがそれだと意のままに置き換えることができるような単純な第一のものではない。」(ebd.)という指摘からも明らかなように、ガダマーは「問い」を、主観的恣意性から生じるものではないと捉えている。ここに、「適用」概念の核心がある。すなわち、精神科学において、「問い」の形成を通じて理解の「尺度」が生じる時、「適用」は、「問い」を練り上げ「尺度」を作る一連の過程においてその都度成立している暫定的理解の契機として、本質的な機能をもっている。

5. 論文「理解の循環について」の検討： 「完全性の先行把握」と適用

本節ではさらに、WM 公刊(1960)直前に発表された論文「理解の循環について」(1959)を参照し、上述の「尺度」がいかなるものであるかについてさらに考察を深化させる。

ガダマーは、ハイデガーの『存在と時間』における解釈学的循環の意義を、精神科学的真理を正しく理解するための構造として捉えている。そして、その理解を可能にする前提として、「先入見 *Vorurteil*」および「先行把握 *Vorgriff*」といった概念を提示し、次のように述べる。

しかし私の見るところ、すべての理解の根底に存する、全体と部分の循環の内容的意味は、さらなる規定によって補完されねばならない。その規定を私は〈完全性の先行把握 *der Vorgriff der Vollkommenheit*〉と呼びたい。それによって、すべての理解を導くある前提が定式化される。その前提とは、実際に意味の完全な統一を描出するもののみが理解可能である、ということである。(GW2: 61f.)

「すべての理解を導くある前提」とは、解釈対象であるところのもの、例えばテキストの言表といったものが、意味の完全な描出を必ず為していると思えることである。「完全性の先行把握」とは、この前提を導出するものであるとされている。テキストが自身のもつ「思いなし *Meinung*」を完全に表現しているとみなすこと、さらには、その思いなしは誤りや個人的なことではなく、われわれにとっても理解されるべきことを完全に言表していると思なすが、この理解されるべき対象こそが、「事柄 *Sache*」に他ならない。

テキスト批判的に読解する、すなわちテキストの外部にある確からしいもの、またそれを保証する「規則 *Regeln*」によってテキストの「思いなし」の正誤を疑うのは、ガダマーにとってはあくまで二次的なものである。「すべての解釈学的制

約のなかで第一のものとは、したがって事柄の理解 *Sachverständnis*, すなわち同じ事柄 *Sache* との関わりをもつこと *Zutun-haben* であり続ける。事柄の理解によって、統一的な意味として遂行可能となり、またこの遂行でもって完全性の先行把握を適用することを遂行可能とするところのものが規定される (GW2: 62)」とガダマーが論じるように、「われわれは、あるテキストを読む時にはこうした完全性を前提する (GW2: 61f.)」。そうでなければ、解釈者であるわれわれとテキストとの間での統一的な意味をもったものとしてテキストを解釈することが不可能となる。そしてまた、二次的な解釈としてテキスト批判を行う事態となったときにも、「[テキスト批判に際してわれわれが従う] 規則の適用に対する正当性 *Legitimation* は、テキストの内容的な理解から切り離すことができない (GW2: 61f.)」。

ここでの「規則 *Regel*」とは、個別的なものを捨象してそれに則るように対象を“整える”ことで、その成果の「確実性」を増すことができるという点で、「方法」と重なる機能をもつ¹¹⁾。

ここでガダマーが述べているのは、全体と部分の循環、特殊と普遍の動的な相補規定がなされているところのものを対象とする精神科学において、「規則」や「方法」に則ることを本質的なプロセスと認めることは不適切であるということである。またそれらを二次的に利用する場合にも、常に一次的に求められるもの、つまり解釈者と解釈対象との間での統一的な意味を参照しながらでなければ、テキストに適切に用いることはできない。この統一的な意味とは、解釈を開始した時点には部分的にのみ分かっており、段々とその全容が分かってくるという類のものではない。統一的な意味、つまりわれわれとテキストが同様に関わっている「事柄」は、常にすでに完全にテキストによって言表されており、われわれにとってもその事態は先行的に把握されている。しかしその先行的に把握されている、テキストが完全に言表する事柄の規定は、先行的把握の内容から固定的であるのではなく、常に規定し直され、組み直されるようなものである。この組み直しは、解釈者による「問い」の提出と、テキストから得られる「答

え」の解釈によって都度なされる。そして、この「問い」が適切であるかどうかは、「完全性の先行把握」の組み直しに適切に寄与しているかどうかという「尺度」でもって測られる。

以上の議論から、精神科学の「手続き」としての「適用」を次のように記述できる。精神科学の場、すなわちテキストを理解する場面において、理解とはテキストの語らんとする統一的な意味の理解、すなわち「事柄」の理解に他ならない。この前提のもとで、理解は初めて可能となる。言表、そしてその集積であるテキストは、常に事柄へと向かうものであり、この事柄を理解することこそが、精神科学において真理を扱う学問としての成立要件となる。ここで「完全性の先行把握」は、理解の根底に働く規定として認められる。この把握は、その都度内容的に規定されるものとして、「問い」の形成における尺度として機能する。そして、この尺度は恣意的に選定されたり、任意に置き換えられたりするものではない。なぜなら、それはテキストの「思いなし」や、解釈者がテキストから読み取る「思いなし」によって最初から決定されているのではなく、「事柄の理解」を遂行するプロセスの中で都度動機づけ直され、方向づけ直されるものだからである。方向づけの修正の連続は、理解のプロセスにおいて、解釈の暫定的成立、つまり「適用」がその都度なされている場において行われる。

言い換えると、「完全性の先行把握」が「問い」の「尺度」として働きつつも、その「尺度」としての内容は規定し直され、組み直されていく。この中で「問い」の方向づけは変容し、「事柄」へ向かう理解の過程は深化していく。これら一連の過程は、「適用」の契機の連続の中で生じている。こうして、精神科学の手続きとしての「適用」の概念が描出されることとなる。

6. 結

本稿では、WM の諸概念のうち、先行研究であまり注目されてこなかった「適用」概念の検討を行った。その際、WM 以外の様々な資料を用いて、WM 内に散りばめられた「適用」につい

ての種々の記述を再構成するという手段をとった。結果、「適用」が精神科学の「手続き」とであるという特徴づけを行った。

今後、われわれは別の観点からも「適用」概念を問い直す。この一連のプロジェクトの目論見とは、ガダマーの記述を分解・再構成することで、ガダマーが言表しようとしていたところの精神科学像を、再び解釈し、言表することである。本稿はそのプロジェクトの一つとして機能する。

哲学内部の議論にとどまらず、人文学分野全体に適用可能である学問的構造の提示が、ガダマー解釈学の解釈によってもたらされる。われわれが抱くこのような期待を十分に提示できていることを願う。

本稿は 2025 年 3 月 7 日に開催された国際ワークショップ“Online Workshop for Philosophical Hermeneutics: Truth, Application, Language: Hermeneutic Dialogue between East Asia and Italy”で発表した口頭報告“Application as a ‘Procedure’ in the Human Sciences: Gadamer’s Hermeneutics as a Theory of the Human Science”を日本語化し、その後の議論を踏まえて改訂したものである。ワークショップを企画された東北学院大学・岡田勇督准教授をはじめ、登壇者ならびに参加者の皆様に深く感謝の意を表する。

凡例 Gadamer, H.-G., *Wahrheit und Methode* (1960) は、WM と表記する。それ以外の著作に関しては全集 (*Gesammelte Werke*, 10 Bde., Tübingen 1985–1995.) に収録されているものは GW と略記し、例えば (GW2: 48) のように巻数とページ数を記す。全集未収録著作は他の著者による著作と同様に参考文献に基づき記す。

注

- 1) 本稿では、大まかには本邦で人文科学と呼ばれる学問群と外延が近いものであるが、特にテキストを主な対象と据えて解釈を行う学問として扱う。具体的には、哲学、文学、歴史学、神学（特に聖書解釈学）、法学（特に法解釈学）といったものが挙げられる。ドイツにおける「精神科学 *Geisteswissenschaft*」について概略がわかるものとして、例えば *Historische Wörterbuch der Philosophie* の当該項が挙げられる。(Diemer,

1974: 211ff.)

- 2) 対話が事柄 *Sache* へと向かっていくとガダマーは WM で何度も繰り返すが、この事柄の身分が何であるか（命題、理念、仮定、実体など）について、明示的には示されていない。このことから、解釈が変容していった先にある最終的な帰結（＝真理への到達）をガダマーが具体的に描出しようとしていたのではないことが伺える。
- 3) Grondin は、ガダマーの作用史 (*Wirkungsgeschichte*) への意識、自覚が先に挙げた WM の問題意識の解決に大きく貢献しているとみている。WM で「歴史意識」批判と「作用史的意識」の議論の間に位置する「適用」やアリストテレス倫理学の議論については、*Urfassung* の段階では未だ存在せず、公開版ではじめて挿入されていたことから Grondin はあまり重視していない (Grondin, 1992: 60ff.)
- 4) WM は現在第 7 版まで改訂されており、それらにおいて内容に大きく変更は施されていないが、まえがきやあとがきが付記された。しかしその一方、WM は公開される以前のヴァージョンが複数存在する。その一つは、ガダマーの手書きの原稿の状態のまま、現物がハイデルベルク大学に現在も保管されている。その原稿のうち序盤の数頁のみをタイプ稿として公表したものが *Urfassung* にあたる。タイプ稿へとおこす作業は、ガダマー研究者である Grondin と Lessing によってなされた。また、それにあたって当時存命だったガダマー本人への聞き取りも行われた。手書きの原稿全体の内容と本人からの聞き取りで得られた情報を用いて書かれたのが Grondin (1992) である。
- 5) Vgl. Grondin, 2001: 154f.
- 6) また、恣意的・主観的なものを排除して、自然科学的客観性を手に入れるために、自身のうちにも「方法」を樹立するよう模索し始めるという精神科学の分野全体の動きのきっかけとして、カントの『判断力批判』による美的判断や趣味判断の徹底的主観化を挙げる。(WM. 48ff.) ガダマーのこの見立てについては Grondin もすでに言及している。(Grondin, 1992: 63f.)
- 7) 本稿において、新カント派という表現は主にマールブルク学派を指すものとして議論を展開する。
- 8) GW10 に収録された際には題名が変更されており、「パウル・ナトルプ」とされている。
- 9) ガダマーはデイルタイの「経験 *Erfahrung*」と「体験 *Erleben*」の差異をあまり重視していないのか、同様の概念として使っているように見える。
- 10) 本稿 33 ページでの引用でも示されるように、デイルタイの精神科学の構想において、種々の経験、またその経験が生み出した成果（芸術作品や著作など）の解釈を積み重ねることにより、解釈者の精神が客観的精神に近づき、新たに解釈される経験に対しての客観的視座が得られる

という発想が見て取れるとガダマーは主張している。解釈者の解釈の積み上げとその精緻化が解釈者の客観性を担保するというアイデアが、自然科学的「方法」に対応する形で精神科学に導入されているというのがガダマーの見立てであることが本稿での議論からも推察されるが、ガダマーのディルタイ批判の妥当性も含めて、より一層詳細に分析してから論じる必要がある。

11) 例えば、「つまり」「したがって」「ここで注目されるべきところのものは」などといった接続詞（またはフレーズ）に後続する文章は、その著者がその文章全体、またはその段落全体で言わんとしていることのまとめであり、その著者が意図するもの、その文章を解釈するだろう解釈者に最も伝えたいものである、と推測できる。これは、ある種の文法や統語、もしくは（話の中での、もしくは慣習的な）文脈といった「規則」に照らした上で推測が行われている。しかし、例えば、「私は今、抽象と具体の関係について述べようとしている。つまり、明日は晴れである。」などといった文章が書かれていた時、これは何かの間違いか、関係のない文章が挿入されてしまったのか、などと、「規則」が適用できない理由を探そうとするのが一般的である。しかしこの文章が、哲学史上の「具体」と「抽象」の関係についての種々の議論への洞察が書き手によってすでになされた上で、両者の関係性について考察するために書かれた文章であるという「背景」が存在するならば、どうであろうか。書き手の考察内容は分からずとも、少なくとも、「つまり」に後続する文章であるならば……、といった規則を、考慮を経ずに当てはめるべきではないということは認められると思われる。このような例は極端であるし、また書き手の「背景」、ないし「意図」が（仮想されたものであるがために）あらかじめ定められている点で、厳密には解釈学的状況には当てはまらない。その上でこの例が示そうとしているのは、「規則」を用いるか否かを決定しているのが、その解釈対象が言表しようとしているところのものである、先行的に把握される「事柄」であるということである。

参考文献

- Davey, N, 2022, Dialogue, dialectic and conversation. In: *Gadamarian Mind*. Hrsg. V. T. George & G.-J. van der Heiden, London/New York.
- Diemer, A, 1974, „Geisteswissenschaften“, In: *Historische Wörterbuch der Philosophie*. Hrsg. J. Ritter, K. Gründer & G. Gabriel, Bd. 3, Basel, 211-215
- Fehér, I. M, 2016, Prejudice and Pre-Understanding. In: *A Companion to Hermeneutics*. Hrsg. N. Keane & C. Lawn, Chichester, 280-288.
- Gadamer, H.-G, 1991, Gadamer on Gadamer. In: *Gadamer and Hermeneutics: Science, Culture, Literature*. Hrsg. v. H. J. Silverman, New York, 13-19.
- , 1992, Wahrheit und Methode. Der Anfang der Urfassung (ca. 1956). Hrsg. v. J. Grondin & H.-U. Lessing. In: *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Bd. 8 (1992-1993), 131-142.
- Grondin, J, 1992, Zur Komposition von »Wahrheit und Methode«. In: *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Bd. 8 (1992-1993), 57-74.
- , 2001, *Einführung in die philosophische Hermeneutik*. 2. Aufl. Darmstadt..
- Lawn, C & Keane N, 2011, *The Gadamer Dictionary*, London/New York.
- Lessing, H.-U, 2024, Nachwort, In: *Vom Zirkel des Verstehens*. H.-G. Gadamer. Ergolding, 35-175.
- Natorp, P, 1910, *Die logischen Grundlagen der exakten Wissenschaften*, Leipzig/Berlin.
- Weinsheimer, J. C, 1985, *Gadamer's Hermeneutics: A Reading of Truth and Method*, New Haven/ London.
- アリストテレス, 2015, 『ニコマコス倫理学』(上巻), 渡辺邦夫・立花幸司訳, 光文社古典新訳文庫.
- , 2016, 『ニコマコス倫理学』(下巻), 渡辺邦夫・立花幸司訳, 光文社古典新訳文庫.
- 下山千遥, 2023, 「ガダマーにおける〈適用-フロネーシス〉の関係性: 『真理と方法』前後の比較を通じて」, 『人間存在論』(29), 京都大学大学院人間・環境学研究科『人間存在論』刊行会, 79-89.

Application as a “Procedure” in Human Sciences: An Examination of the Concept of “Application” in H.-G. Gadamer’s Philosophical Hermeneutics

Chiharu SHIMOYAMA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary This paper reexamines the theoretical significance and functional role of the concept of “application” (*Anwendung*) in Hans-Georg Gadamer’s *Truth and Method* (1960) and related writings. Previous interpretations have often regarded “application” merely as the concretization of meaning within the interpreter’s present situation, overlooking its methodological implications. In response, this study situates Gadamer’s concept within the broader critique of Neo-Kantian and Diltheyian models of human sciences, which sought to ground scholarly validity in methodological certainty. Through a close analysis of Gadamer’s earlier drafts and lectures, this paper argues that “application” functions as a procedural structure for legitimate understanding—one that does not rely on scientific certainty but is guided by the formation of questions and the “anticipation of completeness” (*Vorgriff der Vollkommenheit*). These elements enable “application” to generate a context-sensitive yet non-arbitrary standard for interpretation. Ultimately, this paper reconceptualizes “application” as a central methodological moment in Gadamer’s hermeneutics, and as a structural element for legitimizing humanistic inquiry beyond the paradigm of method-driven science.

Keywords: Gadamer, hermeneutics, application, Neo-Kantianism, methodology of human science